

ソロンのエレゲイア詩『ムーサたちへの祈り』 (13W)におけるホメーロスの比的比喩の機能¹⁾

佐野 好則

紀元前6世紀初頭にアテナイで改革をおこなった立法者ソロンは詩人としても名声が高く、多くの作品を作ったことが知られている²⁾。しかし他のアルカイック期の多くの詩人たちの場合と同様、大部分の作品は失われ、現在まで伝承されたものも、ほとんどは作品の一部が断片的に伝えられたものである。但し、詩神ムーサたちへの呼び掛けに始まる76行からなるエレゲイア詩は、全体が伝えられたとみなされうる唯一の作品である³⁾。

このエレゲイア詩は、ゼウスによる *δίκη* (罰・正義) がその重要な題材となっていることから、古代ギリシアにおける *δίκη* 観の変遷の観点から注目されてきた⁴⁾。またこの詩の全体構成について研究者たちの間で様々な見解が提示され、頻繁に議論が続けられている⁵⁾。この作品の中にはホメーロス叙事詩に用いられる比喩の特徴を備えた比喩が用いられている(17-25行)。この比喩については従来の研究において注目されることが少なかったが、作品の構成上注目すべき機能を果たしていると思われる。本論考においては、『ムーサたちへの祈り』の全体構成に関わる問題を検討した上で、この詩の中で風の比喩が担っている機能を考察したい。

I

『ムーサたちへの祈り』の冒頭においてソロンは神々から授けられる

幸福 (ὄλβος) と人々から受ける名声 (δόξα) を得ることを求める (1-6 行). 次に詩人は財を得ることは望むがそれを不正に (ἀδίκως) 手に入れることは欲しないと述べ, その理由として δίκη がいかなる場合にも (πάντως) やってくることを挙げる (7-8 行). さらに富を神々が授けるものと, 人々が ὕβρις (暴力, 傲慢) によって求めるものの二種類に分け, 前者は人々のもとにしっかり留まるが, 後者は ἄτη (破滅ないし迷妄) と混じり合うとされる (9-15 行). その理由として ὕβρις による行いは長続きせず, ゼウスがすべての終わりを見守ると述べられる (16-17 行). ここでゼウスによる懲罰を風が雲を吹き散らす様に譬える比喩が用いられる (17-25 行). さらに, 不正を行った本人がすぐにその償いをする場合もあれば, 後になってから罰を受けることもあり, また本人は懲罰を免れ, その子供やその後の子孫が償う場合もあるとされる (25-32 行). 以上がこの詩の前半部分となる⁶⁾.

後半部分 (33-76 行) では, まず一般的に人間は, 苦難を受けるまで虚しい期待を持っていると述べられる (33-36 行). そして, 虚しい期待を持つ者, 虚しい努力をする者の例として, 病人 (37-38 行), 卑しい者と姿の醜い者 (39-40 行), 貧しい者 (41-42 行) が挙げられ, 最後の貧者について, 多くの財を得る期待を持っているとされる. 続いて人間の様々な努力の例として船乗り (43-6 行), 農夫 (47-8 行), 職人 (49-50 行), 詩人 (51-2 行), 予言者 (53-6 行), 医者 (57-62 行) が列挙された後に, 物事の結果は人間には測り難く, すべては神々次第であるとされる (63-70 行). さらに後半の結末部 (71-6 行) では, 人間が富を求める欲望には限りがなく, ゼウスが罰として ἄτη を送ると述べられる⁷⁾.

『ムーサたちへの祈り』の構成は Lattimore が示したように, 前に述べられたことに関連する事柄が次々につなげられていく「思考の進展」(‘a progression of thought’) となっており⁸⁾, 全体としての緊密な構成を見出すことはできない. またこの詩においては, 富への欲望, 不正に対する罰, 人間の知や行ないの虚しさ, 限界性などが様々なイメージを伴って繰り返し取り上げられている. このように関連する事柄が並列的に連ねられていき, 個別のモチーフが異なる角度から複数回取り上げられる構成は, アルカイク期の作品に特徴的なものであることも指摘されている⁹⁾. 但し,

緊密な構成がとられていないことを認めた上で、ゼウスの懲罰の働きの叙述が中心となる前半と人間の知や努力の限界性や不確実さの叙述が中心となる後半の二部分に大別することはできるであろう。さらに後半の結末部分(71-6行)で述べられること(罰としてくだされる ἄτη)は前半部分の内容と顕著な関連性を持っており、作品全体の締めくくりとしての性格を帯びている。

前半と後半の間には関連性よりもむしろ相違点が顕著である。前半では正義と不正の区別に関わる語が頻出するのに対して¹⁰⁾、後半では結末部分も含めてそのような語は用いられていない¹¹⁾。このように前半と後半は正と不正の区別という観点において対照的である。さらに、前半部分では富を二つに分け、神々が人間に授ける富はしっかりと留まるとされている(9-10行)のに対し、後半の結末部では、神々が人間に与えた κέρδεα(利益)について、それがゼウスから罰としてくだされる ἄτηに結びつくこととされる(74-6行)¹²⁾。神から授かる財についてのこれら二つの見解は互いに矛盾するようにみえる¹³⁾。

それに対して、前半部分と後半部分の間に何らかの一貫性を見出そうとする見解が提出されている。例えば、Wilamowitzは前半と後半が密接に関係づけられていないことを強調した上で、全体を通して富が一貫したテーマであることを指摘した¹⁴⁾。Christesはこの詩により密接な一貫性を見出す見解を示した¹⁵⁾。それによると、人間の期待がはずれ努力しても失敗に終わるという後半の内容は、前半の最後に述べられた懲罰の遅延、特に罪人の子供達やその後の子孫ら罪のない者たちが罰を受け償いをするものの例証であるとみなされる¹⁶⁾。確かに31-32行で罪のない者が罰を受けることが述べられたすぐ後で、予期せずに苦難を受けて嘆くこと(33-36行)が述べられていることから、これら二つの場合の間に連想が働いていると考えることは適当であろう。しかし、後半全体を通じて自分は無罪でありながら親ないし先祖の罪の償いを受ける場合のみが取り上げられているとはみなし難い。むしろ人間の欲望に限りがないことが示される結末部(71-76行)では、富の獲得において限度を越えてしまい、自らの過ちの故に罰としての ἄτηを受ける場合が強調されると考えるべきである¹⁷⁾。

前半と後半の顕著な違いを認めつつ、後半で述べられた人間の知の限界

性を踏まえて、結末部では新たな視点から前半部で述べられたゼウスによる懲罰が見直されるとする解釈も提唱されている¹⁸⁾。すなわち結末部で人間の富への欲望には際限がないと言われるが(71-3行)、これは、人間には一般的に洞察力が欠如していること、そして人間には神々が幸いと禍を与える基準を理解することができない(63-70行)という後半部を通じて具体的な例を用いて示された主張に基づいている。すなわち結論部は、前半で言われたことの繰り返しではなく、人間は皆、知の限界の故に前半で述べられた富の二区分を理解することができず、神によって利益が授けられる場合でも、適度を越えて富を追求するため懲罰としての *ἄτη* を受ける、という新しい考えが示されているとみなすのである¹⁹⁾。

前半部分と後半部分の関係の解釈としては、最後に挙げた見解には説得力があると思われる。但し、両部分のこのような論理的な関係がアルカイック的な表現形式を持つこの詩の中では明確に表現されていないことも忘れてはならないであろう。例えば後半で述べられる無際限な富の追求が前半で言われる不正な富の獲得と一致すると明確に述べられているわけではない。ゼウスによる懲罰の確実さ(前半)と人間の期待や努力の虚しさ(後半)はそれぞれ印象深く提示され、詩の最後の二行で結びつけられるが、両部分の具体的な整合性については、ヒントが示されるにとどまっている。本論考においては、風の比喩の機能の検討の前提として、富に対する人間の欲望および神から下される罰をめぐる、この詩の前半と後半で異なった観点からの考察が展開されていることを確認しておきたい。

II

次に『ムーサたちへの祈り』の中で用いられている風の比喩の検討に移りたい。

ἀλλὰ Ζεὺς πάντων ἐφορᾷ τέλος, ἐξαπίνης δὲ
ὥστ' ἄνεμος νεφέλας αἶψα διεσκέδασεν
ἠρινός, ὃς πόντου πολυκύμονος ἀτρυγέτιο

πυθμένα κινήσας, γῆν κατά πυροφόρον
 δηώσας καλά ἔργα θεῶν ἔδος αἰπὺν ἰκάνει
 οὐρανόν, αἰθρίην δ' αὐτίς ἔθηκεν ἰδεῖν,
 λάμπει δ' ἡλίιοιο μένος κατὰ πίονα γαῖαν
 καλόν, ἀτὰρ νεφέων οὐδ' ἐν ἔτ' ἐστὶν ἰδεῖν.
 τοιαύτη Ζηνὸς πέλεται τίσις: (13W, 17-25)

しかしゼウスはすべてのことの終わりを見守るのだ。突然に、
 丁度春の風がたちまち雲を散らしてしまうように。
 その風は波多き不毛の海の
 底を揺らし、小麦を産する大地では
 美しい畑を荒らし、天上なる高き神々の棲処へと至る。
 そして再び上空が見えるようにする。
 力強い太陽が肥沃な大地に美しく輝き、
 もう雲は一片も見えない。
 そのようなものなのだ、ゼウスの懲罰は。

この比喩にはホメーロス叙事詩、特に『イーリアス』と類似の語彙・表現
 が多く見出される²⁰⁾。さらに、風が雲を吹き払う様は『イーリアス』にお
 いて繰り返し比喩の題材として用いられている²¹⁾。

またソローンの風の比喩は、構文上もホメーロス叙事詩の比喩によく用
 いられるものと類似の特徴を備えている。ホメーロス叙事詩には、比喩中
 の描写が数行から 10 数行にもわたって展開される long simile が多く見出
 される。これらの長い比喩において用いられる構文の一つに、短く完結し
 ている比喩を、関係代名詞によって導かれる関係節によって拡張する形式
 がある²²⁾。例えば『イーリアス』第 20 巻ではアイネイアースに立ち向か
 うアキレウスをライオンに譬える長い比喩 (164-173 行) は次のように始
 まっている。

Πηλεΐδης δ' ἐτέρωθεν ἐναντίον ὄρτο, λέων ὡς
 σίντης, ὄν τε καὶ ἄνδρες ἀποκτάμεναι μεμάσιν

ἀγρόμενοι, πᾶς δῆμος (Il. 20. 164-6 行).

そして他方ではペーレウスの子が突進した, ライオンのように,
 狂暴な. それを男たちが殺そうと意気込む,
 土地の者が皆集まって...

164 行の最後の λέων ὧς はそれだけで短い比喩として独立しうる. 実際 λέων ὧς のみが短い比喩として用いられている用例がある²³⁾. しかし, 比喩をそこで終わらせずに, 165 行に λέων を修飾する形容詞 σίντης と λέων を先行詞とする関係代名詞が置かれ, 関係節中の描写が続くことにより, 長い比喩が形成されている. このように短い比喩として独立しうる表現の次の行の行頭に形容詞を置き, それに関係代名詞が続く場合も『イーリアス』の long simile において他にも見出される²⁴⁾.

同様に『ムーサたちへの祈り』における風の比喩では, 18 行の ὥστ' ἄνεμος νεφέλας αἶψα διεσκέδασεν は一応比喩として文法的に完結していると思えるが, 次の行の初めに置かれた形容詞 ἡρινός (春の) と関係代名詞 ὅς によって比喩が拡張され, 比喩中の描写が 24 行まで続いている.

以上のように, ソローンの風の比喩は語彙, 内容, 構文上, ホメーロス叙事詩の比喩との類似点を多く備えている. このホメーロスの比喩が『ムーサたちへの祈り』の文脈の中で果たしている役割について, Lattimore は, 比喩中の風の描写がその出発点であるゼウスによる懲罰との類似から離れて独自に展開していくと述べている. さらに彼は, 比喩の後の τοιαύτη (「そのような」25 行) は, 比喩の展開部分ではなくその初め, あるいはむしろ比喩の前の ἀλλὰ Ζεὺς πάντων ἐφορᾷ τέλος (「しかしゼウスはすべてのことの終わりをみそなわす」17 行) を指すと考える²⁵⁾. この解釈によれば, 風の比喩は最初の部分のみ (18 行) がゼウスによる懲罰との類似点を呈するが, その後に続く描写, すなわち 19 行の形容詞と関係代名詞によって導かれる展開部分は, ゼウスの懲罰という文脈から離れることになる²⁶⁾. Lattimore の後, この詩についての研究は盛んになされているが, 風の比喩の機能についてのまとまった解釈は提出されていないようであ

る。ホメーロス叙事詩における比喩が前後の文脈との関わりにおいて担っている役割や、『ムーサたちへの祈り』の全体構成についての研究の成果を踏まえて、この詩における比喩の前後の文脈の関係を吟味し、風の比喩の機能を再検討する余地が残されている。

III

風の比喩の出発点は、ゼウスの懲罰の突然さ (ἐξαπίνης 「突然に」 (17 行)) と風が雲を吹き散らす突然さ (αἶψα 「すぐに, 突然に」 (18 行)) の類似である。ここで注目すべきことは、ἐξαπίνης δέ (17 行) に始まり次の行から比喩に移行する文章が破格構文 (anacoluthon) となっていることである。すなわち、ἐξαπίνης δέ (17 行) で始まる文章は、この副詞が限定する動詞 (例えば「(ゼウスが) 罰する」, 「滅ぼす」等) によって完結するはずであったが、18 行で比喩が始まり、19 行でそれが拡張された後、24 行で比喩の構文が完結した後には、ἐξαπίνης と結びつく動詞は述べられない²⁷⁾。

この破格構文との関連において、19 行以下の拡張部で風の描写の強調点に変化することに注目すべきである。この描写においては風が海から陸そして空へと長い空間的広がりを経過した後に雲を追い払ったとされる。この空間的経過は、時間的経過をも伴うと見なすことができるであろう。この詩の 54 行では予言者について次のように言われている。

ἔγνω δ' ἀνδρὶ κακὸν τηλόθεν ἐρχόμενον.

遠くから人にやって来る禍いを知る。

ここでは(時間的に)後で起こる禍いについて、(空間的に)「遠くからやって来る」と表現されている。これと同様に、風の比喩の拡張部 (19 行以下) においても、海から陸を経て空へという空間的経過は、風が雲を吹き払うまでの時間的経過を含意すると見なすことができる。従って、風が雲を吹き払う際の突然さというこの比喩の出発点から、拡張部では雲を吹き

払うまでの空間的・時間的経過へと強調点が移行している²⁸⁾。

このことから、副詞 *ἐξαπίνης* (17行) と結びついてゼウスの懲罰を表すはずだった動詞は、比喩の最初の行 (18行) のすぐ後に続くならば比喩中の強調点と一致したであろうが、突然さではなく空間的・時間的経過を強調する比喩の拡張部の後では、内容的に相応しくないことになる。従ってこの動詞の省略は、比喩中の強調点の移行に適合すると考えることができるであろう。

比喩中の拡張部における空間的・時間的な経過の強調は、比喩の後に続く文脈と密接に結びついていることに注目すべきである。

τοιαύτη Ζηνὸς πέλεται τίσις· οὐδ' ἐφ' ἐκάστῳ
 ὥσπερ θνητὸς ἀνὴρ γίγνεται ὀξύχολος,
 αἰεὶ δ' οὐ ἐλέληθε διαμπερές, ὅστις ἀλιτρὸν
 θυμὸν ἔχει, πάντως δ' ἐς τέλος ἐξεφάνη·
 ἀλλ' ὁ μὲν αὐτίκ' ἔτεισεν, ὁ δ' ὕστερον· οἱ δὲ φύγωσιν
 αὐτοί, μηδὲ θεῶν μοῖρ' ἐπιούσα κίχῃ,
 ἤλυθε πάντως αὐτίς· ἀναίτιοι ἔργα τίνουσιν
 ἢ παῖδες τούτων ἢ γένος ἐξοπίσω (25-32行)。

そのようなものなのだ、ゼウスの懲罰は。また (ゼウスは)

死すべき人間のように個々の場合に即座に怒ることはないが、
 常に長い間ゼウスから隠れていることはないのだ、罪ある

心を持つ者は。いかなる場合にも最後には明らかにされるもの。
 ある者はすぐに償うがある者は後に。そしてある者たちは、

自分自身は免れ、神々の運命がやって来て襲いかかることはないが。
 いかなる場合にも後にそれはやって来るものだ。罪なき者が行ないの
 償いをするのだ、彼らの子供やその後の子孫が。

ここでは、まずゼウスは人間のように個々の場合について²⁹⁾、即座に怒る *ὀξύχολος* のではないとされる (25-6行)。さらに、それに呼応して29行以下では、不正を行った本人が「すぐに *αὐτίκα*」(29行) 償いをする場合

は 1 行の半分で述べられた後、本人が後になって償う場合、さらに本人ではなくその子供や後の子孫が罰を受ける場合が 3 行半にわたって述べられる。ここでは懲罰が遅延する場合に強調点が置かれている。ゼウスの懲罰が即座に下されるのではなく、後に本人以外の者に下される場合は、比喩の後で初めて述べられたことで、比喩より前の部分では全く言及されていない。そして風が空間的・時間的経過を経た後に雲を吹き散らすという、比喩の拡張部の内容は、ゼウスからの懲罰の遅延と対応する。従って、比喩の中での突然さから経過への強調点の移行は、比喩の後の文脈において懲罰の遅延が提示される契機を作り出しているということができよう³⁰⁾。

比喩の中での視点の移行が、比喩の後で述べられる事柄を先取りする例はホメロス叙事詩の比喩にも見出される³¹⁾。例えば『イーリアス』第 13 巻では、アイネイアースを中心とするトロイア方の将たちの後に軍勢が従ってついて行く様子の描写に次のように羊の群れの比喩が添えられている。

οἱ οἱ ἄμ' ἡγεμόνες Τρώων ἔσαν· αὐτὰρ ἔπειτα
 λαοὶ ἔπονθ', ὡς εἶ τε μετὰ κτίλον ἔσπετο μῆλα
 πίομεν' ἐκ βοτάνης· γάνυται δ' ἄρα τε φρένα ποιμήν·
 ὡς Αἰνεΐα θυμὸς ἐνὶ στήθεσσι γεγήθει,
 ὡς ἴδε λαῶν ἔθνος ἐπισπόμενον ἐοῖ αὐτῶ (Il. 13. 491-495).

彼 (アイネイアース) と一緒にトロイアの将たちが行った。そしてその後人々がつき従った。ちょうど雄羊の後に、羊たちが水を飲もうと牧草地からついて行くように。そして羊飼いは心で喜ぶ。そのようにアイネイアースの心は胸のうちで喜んだ、人々の群れが自分につき従うのを見た時に。

比喩中の描写の前半 (羊たちが雄羊について行ったこと) は、比喩の前でトロイア勢が将たちに従って進んだことと対応する。そして比喩中の描写の後半 (羊飼いが心において喜んだこと) は、比喩の後で初めて述べられること (軍勢が自分の後について来るのを見てアイネイアースが喜んだこ

と) と対応する。このようにホメーロス叙事詩において long simile が比喩の後で初めて言及される事柄と対応する内容を含み、比喩の前後の叙述の展開の契機となる例は他にも多く見出される³²⁾。『ムーサたちへの祈り』における風の比喩は、内容のみでなく、比喩の前の文脈からその後の文脈への展開の契機となるという点においても、ホメーロス叙事詩の比喩に見出される特徴を踏襲しているといえることができる。

IV

『ムーサたちへの祈り』には、風の比喩の前後の叙述のみではなく他にもこの比喩と関連すると思われる箇所がある。それは詩の後半で人間たちの虚しい努力が列挙されているが、その中の船乗りの活動の描写である。

..... ὁ μὲν κατὰ πόντον ἀλάται
 ἐν νησὶν χρήζων οἴκαδε κέρδος ἄγειν
 ἰχθυόεντ' ἀνέμοισι φορεόμενος ἀργαλέοισιν,
 φειδωλὴν ψυχῆς οὐδεμίαν θέμενος (43-6 行).
 ……ある者は魚に満ちた海をさまよう、
 船に乗って、家へ利益を持ち帰ることを望みつつ、
 厳しい風に運ばれながら、
 命を全く惜しみもせずに。

風の比喩との関連性は、船乗りが厳しい風によって (ἀνέμοισι…… ἀργαλέοισιν) 運ばれるとされていることのみではない。船乗りについては「命を全く惜しまずに」(46 行) と言われているが、比喩の中で描かれるような風が海の底を揺らす (πόντου …… πυθμένα κινήσας)³³⁾程の嵐は、船乗りが命の危険に遭遇する状況に当てはまる。従って 43-6 行における船乗りについての描写は、風の比喩の中の海の嵐への言及と結びつく。

さらに船乗りの危険に続いて、農夫の労働が描かれる。

ἄλλος γῆν τέμνων πολυδένδρεον εἰς ἐνιαυτὸν

λατρεύει, τοῖσιν καμπύλ' ἄροτρα μέλει (47-8 行).

またある者は、樹の多い土地を一年中耕しつつ

雇われ仕事をする。そのような者たちは曲がった犁に心を向ける。

ここでは農夫の労働のうち、畑を犁で耕す作業がとりあげられている。農作業の失敗の危険性や不確実さについて明示的には述べられていない。しかし、この一節を含む様々な期待や活動のリストの前置きとなる 33-6 行で、人々が苦難を受けて嘆くまで、空しい希望に心を楽しませている様が述べられていることと、リストの後の部分では「すべての行ないに危険が存在する。物事が始まると将来どのような状態になるのか誰も知らない (65-6 行)」と述べられていることから、リストの中に挙げられた個々の事例は、期待や努力の不確実さの例としての意味を持たされている。実際に、具体的に挙げられる 6 種類の職業的活動のうち半分の船乗り、予言者、医者の場合に失敗や不確実さへの何らかの言及がある³⁴⁾。残りの農夫、職人、詩人への言及は、彼らの営みにまつわる失敗や不確実さあるいは虚しさが明示されていないが、それらを思い起こさせる文脈の中に置かれているといえることができるであろう。農夫の労働について、その努力が虚しく終る場合として容易に思い浮かぶ状況は悪天候により畑の作物が荒されることであると Alt と Nasselrath は指摘する³⁵⁾。そしてこの状況に一致する耕作地に対する被害への言及が風の比喩の中に組み込まれていることは注目すべきであろう。

風の比喩の中では、作物への影響について γῆν κατά πυροφόρον δηώσας καλὰ ἔργα (20-21 行) と述べられている。δηώω (δηϊόω) という動詞は『イーリアス』では「(敵を) 斬る, 倒す」, 「(盾などを) 切り裂く」という意味で繰り返し用いられている³⁶⁾。その後「(土地を) 荒す」の意味で用いられるようになり、例えばヘーロドトスの『歴史』においては、軍隊が敵方の土地に対して行なう破壊行為について用いられている³⁷⁾。風の比喩の中では、この動詞は樹木や穀物を実らせる畑の植物 (cf. πυροφόρον (20 行)) を倒すことを主に意味するとみなしてよいであろう。穀物は主に秋

に播種され³⁸⁾、雨期である冬に育つ。それゆえ収穫前の春の嵐は穀物にも被害を与えたことであろう。従って先に検討した船乗りの場合のみではなく、農夫の場合についても、風の比喩中の描写との関連性を見出すことができる。

『イーリアス』の比喩の中には、その直後の叙述ではなく、より後に起こることが比喩中の描写に盛り込まれていると解釈しうるものがあることが指摘されている³⁹⁾。例えば『イーリアス』第16巻751-4行でパトロクロスが突進する様子をライオンに比べる比喩には、ライオンが傷つけられて死ぬことへの言及が含まれている。しかしパトロクロスはこの比喩の後で暫く敵勢への攻撃を続ける。そして比喩中のライオンの負傷と死に対応するパトロクロスの負傷と死は、同巻の812-857行で叙述される⁴⁰⁾。『イーリアス』の比喩におけるこのような予示は、『ムーサたちへの祈り』の風の比喩が後半部の船乗りと農夫の描写と結びつく内容を含んでいることの類例とみなすことができるかもしれない。

風の比喩との類似性を示す表現は、『ムーサたちへの祈り』の中で人間が神から授かる富について述べる次の行にも見出される。

ἔμπεδος ἐκ νεάτου πυθμένος ἐς κορυφήν (10行)。

最も低い底から頂上に至るまで堅固な。

この描写が具体的に何のイメージを表すものであるかは判然としないが⁴¹⁾、*πυθμήν* という語は風の比喩の中(20行)でも「海の底」として用いられている。さらに比喩の中では、風の影響の及んだ範囲として、海の底・陸上・空が列挙され、下から上への方向性が印象づけられるが、これと10行の「最も低い底から頂上に」という方向性とは重なる。

また『ムーサたちへの祈り』の中では、原因より発し結果へ至るプロセスが繰り返し表現されていることに注目したい。前半部では不正な富の獲得からゼウスによる懲罰に至るプロセスが中心的な内容となっている。そして、不正な富に混じり合う(13行)とされる *ἄτη* について次のように述べられている。

ἀρχῆς δ' ἐξ ὀλίγης γίγνεται ὥστε πυρός,
 φλαύρη μὲν τὸ πρῶτον, ἀνηρῆ δὲ τελευτᾶ (14-15 行) ⁴²⁾.
 それはちょうど火のように小さな始まりから生じる。
 最初は些細なものであるが最後には苦難に満ちたものとなる。

後半の人間の営みのリストの中では、医者について次のように述べられている。

ἄλλοι Παιῶνος πολυφαρμάκου ἔργον ἔχοντες
 ἰητροί· καὶ τοῖς οὐδὲν ἔπεστι τέλος·
 πολλάκι δ' ἐξ ὀλίγης ὀδύνης μέγα γίγνεται ἄλγος,
 κούκ ἂν τις λύσαιτ' ἤπια φάρμακα δούς·
 τὸν δὲ κακαῖς νούσοισι κυκώμενον ἀργαλέαις τε
 ἀψάμενος χειροῖν αἶψα τίθησ' ὑγιῆ (57-62 行).
 他には多くの薬を心得たパイオンの業を持つ
 医師がいる。そして彼らにも（技術の）完成はない。
 しばしば小さな痛みから大きな苦痛が生じ、
 鎮痛の薬を与えても治せないことがある。
 しかし、悪しく苦しい病にかかった者を
 両手で触れるだけでたちまち健康にすることもある。

59 行の痛みの経過の描写は、先に引用した 14-15 行の ἄτη の経過の描写と類似している。また治療法（施薬・手で触れること）とその効果の叙述（60-2 行）もプロセスの表現となっている。こちらは病の治癒に至る治療法を常に正しく施す技術の完成 (τέλος) は医者には得られないことの例示となる。

さらに 65-6 行では、人間には出来事の行く末を知ることができないことについて次のように述べられている。

..... οὐδέ τις οἶδεν

πῆ μέλλει σχήσειν χρήματος ἀρχομένου (65-6 行).

……物事が始まると、
将来どのような状態になるか誰も知らない。

ゼウスによる懲罰のプロセスの叙述に添えられた風の比喩は、風が海で影響を及ぼし始めてから、雲が吹き散らされるまでの空間的・時間的プロセスを描いたものであり、以上に列挙した原因から結果へのプロセスを表す一連の表現の一環をなしている⁴³⁾。そしてこれらの表現のうち、詩の後半部分に置かれたもの(57-62行, 65-6行)は、結果を正しく判断することの不可能性と結びつけられていることに注目したい。

V

以上の考察を踏まえて、風の比喩が『ムーサたちへの祈り』の全体的な構成の中で果たしている機能についてまとめることにしたい。

IIIにおいて論じたように、この詩の前半でゼウスの懲罰の過程を叙述する文脈の中で、風の比喩は懲罰が遅延し、罪のない者たちに罰が下される場合もあるという前半の最後の論点を準備する。そしてこの罪のない者に対する懲罰という論点は、苦難を受けることを全く予期せず虚しい期待に心を喜ばせている、という後半の最初に述べられる人間たちの一般的な姿と関連性がある。従って、風の比喩の拡張部分は、この詩の全体構成において前半部分の締めくくりとなり、後半部分への橋渡しともなる論点を準備する機能を果たしているとみなすことができる。

さらにIVで論じたように、比喩中の風が海と陸で及ぼす影響は、後半の人間の虚しい努力のリストの中にある船乗りと農夫の活動と対応している。この対応は『ムーサたちへの祈り』の全体的な構想の中に位置づけられるべきものだと思われる。Iで考察したように、この詩の前半部分と後半部分は論理的に緊密に結びつけられてはいないが、両部分の間には関連性が見出される。そして前半と後半の関連性を強めるように、両部分に共通するモチーフが配置されている。富への欲望は前半の3, 7, 9-10行で

言及され、また後半では 41-2 行と結末部の 71, 74 行で言及される。ἄτηは前半の 13-4 行と後半の 67-8 行と結末部の 75-6 行 (ἄτη……, ἦν ὁπότε Ζεὺς πέμψη τεισομένην) に用いられている。最後の箇所では ἄτηが罰としてくださったものであることを示すために動詞 τίνω の分詞形 (τεισομένην) が用いられている。この動詞は前半の 25 行でゼウスによる懲罰の意味で用いられた τίσις と同語源であり、この対応も前半と後半を結びつけるものである。さらに、冒頭の祈願の中で詩人はムーサたちに神々よりの ὄλβος とともに人々からの δόξα (名声) も願い求めている。これとおなじ δόξα という語が後半部の始め (34 行) で用いられている⁴⁴⁾。また後半の人々の活動のリストの中では、詩人たちに対するムーサたちの賜物への言及 (51-2 行) があり、冒頭と同じ女神たちへの祈願との関連性を作り出している。風の比喩の中での、風が海と陸に対して与える影響と、人々の活動のリスト中の船乗りと農夫の対応点も、このような前半と後半の関連性を強める様々な対応の一環をなすものと考えられるであろう⁴⁵⁾。

また IV では『ムーサイたちへの祈り』において原因から結果へ、発端から結末へのプロセスを表す表現が繰り返されていることを指摘した。これらの表現は前半と後半の関連を作り出すとともに、不正な行為から罰としての ἄτηへと至るプロセスの確実さが主題となる前半と、人間にとっては結果が不可知であることを主題とする後半との対照性を際立たせている。そして風の比喩は、雲を吹き散らすに至るまでの経過の明瞭なイメージを伴って、前半部のプロセスの確実さの印象を強めることに寄与している。

以上の考察から明らかのように、風の比喩は、Lattimore の判断したように詩の文脈と関係なく風の描写が展開しているのではない。空間的・時間的広がりを含むこの比喩の描写は、その直前と直後の文脈と密接に結びついていると共に、詩全体の構成を支える要素の一つとしての機能を果たしている。そして比喩中の描写とその前後の叙述、およびより広い文脈との間に、このように多様な対応点を作り出されていることにおいて、ホメーロス叙事詩の特徴を受け継いでいると見なすことができる。

注

- 1) ソローンの詩は M. L. West, *Iambi et Elegi Graeci*, editio altera, Oxford. U. P., 1971 の番号に従って引用する。『ムーサたちへの祈り』は古代から伝承された題名ではなく、この詩の冒頭部分に因んで便宜的につけられたものである。
- 2) Cf. West, *op. cit.* (注 1), p. 139.
- 3) この詩全体を伝承するのは紀元後 5 世紀のストバイオス (*Eclogae* 3. 9. 23) のみであるが、部分的にはより古い引用や模倣がある。例えば 65-70 行と 71-76 行は若干変更してテオグニス歌集のそれぞれ 585-590 行と 227-232 行に編入されている。またアリストテレース (『政治学』1256b31) やプルータルコス (『ソロン伝』2. 4, 『プープリウス伝』24. 7, *De cupid. divit.* 524e) はこの詩の一部を引用している。キュニコス派のクラテースにはこの詩を模倣した作品 (fr. 1 Diehl) がある。その他ソロン 13W の引用等についての詳細に関しては West, *op. cit.* (注 1), p. 150 参照。
- 4) F. Solmsen, *Hesiod and Aeschylus*, Cornell U. P., 1949, pp. 107-123; H. Lloyd-Jones, *The Justice of Zeus*, University of California Press, 1971, pp. 43-5; E. A. Havlock, *The Greek Concept of Justice*, Harvard U. P., 1978, pp. 249-262.
- 5) 13W についての研究史の概観としては, A. Spira, "Solons Musenelegie", G. Kurz, et al. edd. *Gnomosyne: Festschrift für W. Marg zum 70. Geburtstag*, C. H. Beck, 1981, SS. 177-196 および最近の傾向については H.-G. Nasselrath, "Göttliche Gerechtigkeit und das Schicksal des Menschen in Solons Musenelegie", *Museum Helveticum* 49, 1992, SS. 91-104 参照。
- 6) 前半部の内容のうち神から得た富と不正な仕方でも獲得した富の対比の類似例はヘーシオドス『仕事と日々』320-326 行に見出される。また不正を行った者に対する神々による懲罰は遅れることがあっても確実に果たされるという神義論は、ソローンのエレゲイア詩 4W の次の箇所にも見られる。

οὐδὲ φυλάσσονται σεμνὰ Δίκης θέμεθλα,
 ἢ σιγῶσα σύνοιδε τὰ γινόμενα πρό τ' ἐόντα,
 τῷ δὲ χρόνῳ πάντως ἦλθ' ἀποτεισομένη (4W, 14-16 行)。

また彼らはディケー女神の厳かな御座に注意を払わない。
 女神は黙っているが起りつつあること、過去のことをすっかり知っており、
 時を経て必ず償わせるためにやって来るのだ。

この考えの先駆は『イーリアス』第 4 巻 160-2 行およびヘーシオドス『仕事と日々』213-24 行に見出される。さらにテオグニス 145-6 行, 197-208 行も参照。

- 7) 後半部における人間の知識の限界性の認識,特に神々の意図が人間たちには測り難いことはソロンの次の断片にも表れている。

πάντη δ' ἀθανάτων ἀφανῆς νόος ἀνθρώποισιν (17 W).

不死なるものたちの意図は人間どもに対して完全に隠されている。

- 8) R. Lattimore, "The First Elegy of Solon", *American Journal of Philology* 68, 1947, p.162.
- 9) H. Fränkel, "Eine Stileigenheit der frühgriechischen Literatur", *Wege und Formen frühgriechischen Denkens*, C. H. Beck, 1960, SS. 70-1; B. A. Van Groningen, *La composition littéraire archaïque grecque*, deuxième édition, N. V. Noord-Hollandsche Uitgevers Maatschappij, 1960, pp.94-7; 逸身喜一郎, 『古代ギリシャ・ローマの文学——韻文の系譜——』, 放送大学, 1996, 146-8 頁.
- 10) ἀδίκως (7 行), ὑφ' ὕβριος (11 行), ἀδίκους (12 行), ὕβριος (16 行), ἀλιτρὸν (27 行), ἀνάιτιοι (31 行).
- 11) 33 行の ἀγαθός, κακός は正・不正の区別ではなく, 身分の違い(「立派な, 卑しい」)を表す. 67, 69 行の εὖ ἔρδειν, κακῶς ἔρδοντι は, 「正・不正」ではなく「成功・失敗」の対比を表す. Cf. Nasselrath, *op. cit.* (注 5), S. 94, Anm. 7.
- 12) ἐξ αὐτῶν ἀναφαίνεται (75 行) において αὐτῶν は, κέρδεα (74 行) を指すとする見解が優勢である. Cf. D. A. Campbell, *Greek Lyric Poetry*, Bristol Classical Press, 1967, p. 75.
- 13) このような前半部と後半部の違いから, 両部分は本来別の作品であって, それ結び合わせられたと考える研究者もいた. Cf. Spira, *op. cit.* (注 5), pp. 179-182.
- 14) U. von Wilamowitz, *Sappho und Simonides*, Weidmann, 1913, SS. 257-275.
- 15) J. Christes, "Solons Musenelegie (Fr. 1 G.-P.=1 D.=13W.)", *Hermes* 114, 1986, SS. 1-19.
- 16) *Ibid.*, SS. 6-7.
- 17) Cf. A. W. Allen, "Solon's Prayer to the Muses", *Transactions of American Philological Association* 80, 1949, p.54.
- 18) Nasselrath, *op. cit.* (注 5).
- 19) *Ibid.*, SS. 94-104.
- 20) Campbell, *op. cit.* (注 12), pp. 236-7. ἀπρύγετος および πυροφόρος はホメロス叙事詩においてそれぞれ海と畑(土地)のエピセツトとしてしばしば用いられている. その他以下の表現についても『イーリアス』に類似表現が見出される。

καλὰ ἔργα (ἔργα . . . καλά *Il.* 5. 92) ; θεῶν ἔδος αἰπὺν ἰκάνει οὐρανὸν ἴκανε θεῶν ἔδος, αἰπὺν Ὀλυμπον *Il.* 5.868) ; ἡελίοιο μένος (μένος ἡελίοιο *Il.* 23. 190); πίονα γαῖαν (πίονα ἔργα *Il.* 12. 283).

また海と耕作地に対する風の影響の描写 (19-21 行) には、ヘーシオドス『神統記』 872-880 行との類似性が見出される。後者においては、テュポエウスから吹いて来る風が海上の船と畑とに被害を及ぼす様が描写される。

- 21) *Il.* 3. 10-12; 4. 275-9; 5. 522-6; 11. 305-8; 16. 297-302; 16. 364-5 等. Cf. H. Fränkel, *Die homerische Gleichnisse*, 2., unveränderte Auflage, Vandenhoeck & Ruprecht, 1977, SS. 21-25.
- 22) M. W. Edwards, *The Iliad: A Commentary*, vol. 5, Cambridge U. P., 1991, p. 26.
- 23) ὁ δ' ἐναντίον ὄρωτο λέων ὡς Ἀτρεΐδης (*Il.* 11. 129-30 行). Cf. M. W. Edwards, *Homer: Poet of the Iliad*, Johns Hopkins U. P., 1987, pp. 107-8.
- 24) E. g., 16. 156-66; 17. 281-3. Cf. Edwards, *op. cit.*, (注 22), p.26.
- 25) Lattimore, *op. cit.* (注 8), pp. 164-5.
- 26) 但し Lattimore, p.165 は、畑の作物に害を与える風は 'somewhat indiscriminate' である点においてゼウスと似ていると述べている。
- 27) Lattimore, *op. cit.* (注 8), p.164; Gerber, *Euterpe*, Adolf M. Hakkert, 1970, p.126.
- 28) Fränkel, *op. cit.* (注 9), S. 70, Anm. 1 はこの比喩には冬から春そして夏へとという季節の移行が表現されていると考えている。そうであればこの比喩はさらに長い時間的経過を包含するものとなる。
- 29) ἐκάστω は中性と解する。Cf. Campbell, *op. cit.* (注 12), p. 237.
- 30) 別の観点からも、比喩の拡張部と比喩に続く叙述との関連性が指摘されている。K. Alt, "Solons Gebet zu den Musen", *Hermes* 107, 1979, S.396 および Nasselrath, *op. cit.* (注 5), S.96 は、風が海を荒らし作物をいためることと ἀναίτιοι ἔργα τίνουσιν (31 行) との間に対応を見出す。
- 31) Fränkel, *op. cit.* (注 21), SS. 6-7; Edwards, *op. cit.* (注 23), pp. 107-8; *Id. op. cit.* (注 22), p.32.
- 32) 例えば *Il.* 12. 145-152; 13. 491-5; 13. 795-801; 15. 623-9; 17. 281-5 等。
- 33) πυθμὴν という語は、ヘーシオドス『神統記』 932 行、テオグニス 1035 行等でも海の底の意味で用いられている。『縛られたプロメーテウス』1046-7 行では、大地を揺らす嵐について χθόνα δ' ἐκ πυθμένων αὐταῖς ρίζαις πνεῦμα κραδαίνοιと述べられている。
- 34) 船乗り (45-6 行), 予言者 (55-6 行), 医者 (58-62 行)。
- 35) Nasselrath, *op. cit.* (注 5), S.99; Alt, (注 30), S. 400, Anm. 46.
- 36) Cf. *Lexikon des frühgriechischen Epos*, s. v. 'δηῖόω, δηόω'.
- 37) 5. 89. 2; 6. 135. 1; 7. 133. 2; 8. 33; 8. 50. 2; 8. 121.1.
- 38) M. L. West, *Hesiod: Works and Days*, Oxford U. P., 1978 ad 614 & 617.

- 39) 川島重成『『イーリアス』における神々と比喩』『西洋古典文学における内在と超越』, 新地書房, 1986, 48-54 頁; Edwards, *op. cit.* (注 23), pp. 105-6.
- 40) 同様に比喩中の動物の死への言及が, 直後の文脈とは対応せず, その比喩が添えられた人物の将来の死を予示すると考え得る例としては, *Il.* 12. 41-8 行, 12. 299-306 行, 20. 164-173 行を挙げることができる. その他『イーリアス』における比喩が直後の文脈で叙述されない将来の出来事との対応を示す例については前注の文献を参照.
- 41) 建物, 樹木, 畑に育つ穀物等が考えられる. Cf. Campbell, *op. cit.* (注 12), p. 236; Gerber, *op. cit.* (注 27), p. 125.
- 42) ἀρχῆς δ' ἐξ ὀλίγης は West による読み換え. 写本は ἀρχῆ δ' ἐξ ὀλίγου.
- 43) プロセスの表現はソローンの他の作品の断片にも見出される. 9W では次のように気象現象のプロセスが政治的プロセスと並べられている.

ἐκ νεφέλης πέλεται χιόνος μένος ἠδὲ χαλάζης,
 βροντῆ δ' ἐκ λαμπρῆς γίνεταί ἀστεροπῆς·
 ἀνδρῶν δ' ἐκ μεγάλων πόλις ὄλλυται, ἐς δὲ μονάρχου
 δῆμος αἰδρίη δουλοσύνην ἔπεσεν (9W).
 雲から雪や霰が生じ
 輝く稲妻から雷が生じる.
 そしてポリスは有力な男たちのゆえに滅び, 民衆は
 愚かさのゆえに独裁者への隷属に陥る.

『ムーサたちへの祈り』において不正に対する懲罰という倫理的プロセスが風に譬えられていることと似た視点であるということができよう. 他に 6W では, 十分な思慮を持たない人間に大きな富が与えられた時, κόρος (飽満) が ὕβρις (暴力) を生むとされている. ここに表現されたプロセスは, 『ムーサたちへの祈り』で不正に獲得された富が ὕβρις と結びつけられていること (11, 16 行) を思い起こさせる.

- 44) 34 行の δόξα は「考え, 憶測」の意味であるとみなされることが多いが, LSJ, s. v. 'δόξα', III 1 では 4 行と同じく「名声, 評判」の意味であると解されている (*Revised Supplement*, 1996, q. v. ではこの点がより明確に記されている). 但し, 34 行前半の読みの問題があるため, この行の δόξα の意味を確定することは難しい.
- 45) Allen, *op. cit.* (注 17), p. 56 は人間の虚しい期待や努力のリストが病気の者 (37-8 行) から始まり, 病状の経過の描写を含む医者 (57-62 行) で終ることにより, リストの最初と最後の間に関連性が作り出されていることを指摘している. これは様々な共通のモチーフの配置によりこの詩の前半と後半に関連性

が作り出されていることと似た技法が、より小さなスケールで用いられているものとみなすことができよう。

- *) 本稿は平成 10・11・12 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「ギリシア・ローマ文学における叙述技法の解明を基礎とする作品論研究」(課題番号 10610536) による研究成果報告の一部である。